

人物画評価の客観性の検討

長谷俊彦

一 目 的

プロジェクト・テクニクによるところのパーソナリティ診断技法の一つである「人物画」の分析は、マコーヴァ Machover, Karen の研究 (Personality projection in the Drawing of the Human Figure, 1949.) をもとに現在の発展をみるのであるが、一九五四年、ブラム Blum, R. H. (The validity of the Machover DAP technique.) をはじめとして多数の研究者が、マコーヴァの人物画テストの妥当性について、とくにその象徴的意義と、その人物画の巧拙についての関係をきびしく批判したのでも知られるように、この方面における研究はまだ新しい試みでもあり、当然そのテストの妥当性、信頼性の確認もさらに強く要請されているのが現状であると考えられる。

人物画法のみならず、一般にプロジェクト・テクニクによるところの各種検査の分析および診断には、常に検査者の主観的要素が介入する危険性が問題となり、ひいては検査そのものの妥当性、信頼性の問題へと発展してゆくのである。

ところで、このマコーヴァの研究に先がけて、人物画が心理検査に用いられたのはかなり古い時代にさかのぼり、

一九二六年グデナフ Goodenough, F. L. による「人物画による知能検査」(Measurement of Intelligence by Drawings, 1926.) がその最初と考えられるのである。

グデナフは人物画を描かせることによって、知能の発達水準の判定を試みたのであった。女史の方法は描かれた人物画を、その各部位の発達的变化について分析しながら問題となる個所についてチェックしてゆく方法であり、そのチェックされた数量により知能水準をみようとしたのであった。

このチェック法とその数量による診断および判定は、われわれのここに取り上げた大伴氏の「人物画による性格分析」における方法に重要な示唆を与えたものと考えるのである。

すなわち、この両者を比較すれば、グデナフの「人物画による知能検査」においては、チェックされる部位およびその数量が多ければ多いほど、知能水準が高く評価されるのに対して、大伴氏の「人物画による性格分析」では、チェックされる部位およびその数量が多ければ多いほど、パーソナリティに問題とすべき点があると評価される点において、方法的な類似を見出すのである。

もちろん、知能検査とパーソナリティ検査という両者の基本的差異がある以上、その分析項目自体の取り上げ方も自ら異なることはいうまでもないが、ひとしく人物画を分析する上において、その類似は考慮すべき二三の点を残していると考えられるのである。

大伴式の方法においては、チェックの個所に各々象徴的符号(S、M、C、F、Sch、N、PS、B、X、Y)が付しであり、それらの集計値およびそのバランスを考慮してパーソナリティを診断しようとするのである。これらの象徴的符号およびチェック項目そのものの妥当性についても、こんご検討を要するのではないかと考えるのであるが、先づ「人物画による性格分析」の判定における客観性について検討してゆきたいと考えるのである。

ここで取り上げる大伴氏の人物画による検査法においても、分析表の一五一項目のチェック・ポイントを検討すると、客観的に経験、未経験を問わずに十分チェックできる項目も多少存するが、その大多数の項目が分析者の主観的感覚に訴えるものであると考えるのである。

そこでわれわれは、大伴氏の人物画法の分析およびその判定についての客観性の検討を試みようとするのである。

大伴氏の人物画法の分析に際しても他の諸検査と同様に、施行時の描画状態およびその分析時の状態など種々の考慮をはらわなければならないことは言うまでもなく、分析者の心理状態、経験、教育、人物画テストそのものにおけるキャリア等によってもチェックされる項目が異って来るであろうことは十分考慮されるところである。

以上の如く、人物画の分析が、各々の分析者によって必ず一致するとは考えられず、人物画の分析基準もまだその確かな規定をみるに至らない現状においては、各分析者個人のキャリアと分析感覚の固定化を待つほかないと考えられるのである。

この様な疑問の上に、われわれは人物画分析に際して、如何程の一致性が認められるか、いいかえればどれ程の客観性が認められるか、という問題のもとに一二の試みを行ったのである。

二 方 法

われわれは、人物画検査の客観性の検討にあたって次の様な二つの方法を用いた。

- 〔一〕 H、一九才（男子）の Depression と精神科で診断された患者に対して、人物画検査を施行したのである。それを以下の二つのグループの各人が大伴氏の人物画分析規準表にしたがって分析を試みたのである。なお、Hの臨

床症状は、気分としては Depressive、思考制止や軽度の関係念慮があると認められるものである。

- (1) 第一グループとして、今春教養課程を終え専門課程に入った男女学生、計三十五名が人物画の分析にあたった。彼らは、プロジェクト・

テクニクのみならず如何なる心理検査にも実際に接したことはない者ばかりである。

しかし、その専攻しようとするものが教育学、あるいは教育心理学である関係上、多少なりともこの種の問題には興味ないしテストの概念はもっているであろうと想像できる。

これらの学生に対し前述の H の描ける人物画と、大伴氏の人物画分析規準表を与えて分析にあたらせたのである。なお、分析にあたって、H の年令および病名その他一切の事項は伏せておいた。

- (2) 第二グループとして、人物画テストを研究している者、および他のプロジェクト・テクニクを十分に用いる能力のあるもの、計九名を対象グループとして取り上げたのである。

これら二つのグループの分析項目の検討は、大伴氏の人物画分析規準表における一〇一五一の項目別に統計的処理を試み、各々のグループ間の差についてそれぞれ検定を試みたのである。

- (1)、(2)、の二つのグループに対し、人物画二十例を提示し、大伴氏の人物画分析規準表によらずに、ただパースナリティ診断という立場から、言うなれば各人の直感的判断に訴え、次の四類に分類する実験を試みたのである。
- 第一類、人物画テストにおける画像として、ほとんど問題が認められない。

H. 19才(男子)の描いた人物画
診断病名 Depression.

第二類 同じく、やや問題とすべき点が認められる。

第三類 同じく、かなり問題の多い画像である。

第四類 同じく、非常に問題の多い画像である。

以上の四類であるが、この実験における判定は、比較的短時間の中に①～②のケースを次々と提示してゆき、一ケースごとに記名投票様式をもって評価、判定を試みてもらったのである。

この試みに用いた人物画二十例の内訳は、精神科において、精神分裂病であると診断された患者の描ける人物画十三例、正常者の描ける人物画七例であり、これらの人物画二十例の提示、配列順序は無作意とし、また各々の判定者には被験者の病名その他一切を伏せて提示した。

この判定に際しては、①～②番までの人物画を次々に提示していったので、前述の分類にとまどう場面も実験中しばしば見受けられたのであるが、判定後訂正を申し出る者は皆無であった。

しかし、判定者の個人差あるいは人物画分析のキャリアの差が、判定時間に多少関係があるのではないかと考えられる。なお、②のグループの中、四名の者はながく人物画テストを研究している者であり、四者の判定には予備実験においても差異が認められなかったので、この実験の検討の際、これを基準判定として用いるとともに他の各人との差異を考察することにしたのである。

なお、参考までに大伴氏の人物画分析標準表を掲げておく。又、〔二〕の実験で用いた人物画二十例は、ここに掲げることとを省略する。しかし、その実験において人物画を提示して行った順序は、次のとおりであるので参考までに記しておきたい。

分 析 規 準 表

部位	分 析 規 準
1 位 置	1 上 半 (全点の $\frac{1}{2}$) 2 下 半 ($\frac{1}{2}$) 3 左 半 ($\frac{1}{2}$) 4 右 半 ($\frac{1}{2}$) 5 上半右半 6 上半左半 7 下半右半 8 下半左半
2 大 小	9 大きい (% 以上) 10 小さい ($\frac{1}{2}$ 以下) 11 被験者の性の方不釣合に大きい 12 被験者の性の方不釣合に小さい
3 容 姿	13 行動を伴う (走っている) 14 その他の動作を伴う (例・歩いている) 15 坐っている, よりかかっている 16 体が傾いている 17 寝転んでいる 18 後向き 19 一方の性又は両方の性とも横向き 20 左右が極度に均斉を失っている 21 線に極度にかたい 22 線が極度にやわらかい 23 線が機械 (的) 全部線描き, 幾何学的) 24 線が極度にこまかい 25 線が極度にあらい (短いスケッチ, 棒線) 26 次の部位省略——頭, 胴, 手腕, 足脚
4 描 画 順 序	27 腕及び手から書く 28 腕及び手を最後にかく 29 脚及び足よりかく 30 頭を最後にかく 31 顔を最後にかく 32 胴体よりかく 33 あちこちと一定の順序なく飛石的にかく 34 消したり, なでたりしてかく 35 本人の性の像をあとかく
5 頭	36 著しく大きい頭 (胴体の $\frac{1}{2}$ 以上) 37 著しく小さい頭 38 裏向きの頭 39 頭髪を注意深く取扱う (帽子をつけて毛髪を出したのも含む)

	40 頭髪のない男 41 頭髪をかるくぼやかす 42 頭髪を上にしててかく 43 頭髪を非常に長くかく (毛深いのも含む) 44 頭髪を黒くぬる 45 頭髪が顔の両側に肩まで垂れさがる 46 大げさな髪型の女
6 顔	47 顔の部分が漠とした線でかく 48 顔をやや下向きに目は鋭く 49 わるい表情 (みにくい, バランスのない場合も) 50 ソバカスのある顔 51 顔にしわや影をつける 52 特に強調 (化粧をする, 女らしい男の顔, 男らしい女の顔)
7 目	53 強調した目 55 大きい目 55 目の省略 56 瞳の省略 57 瞳の強調 (黒くかく, 又は縦にかく) 58 小さい目 59 閉じた目 60 見るとはなしの, うつろな目 61 男性像にまっげ
8 鼻	62 大きく強調 63 鼻をぬりつぶす 64 明暗をつける, 又はゆがみ 65 小さい鼻又は欠けた鼻 66 鼻がない 67 特に目立った鼻穴をかく
9 口	68 大きい口 69 特殊な形で強調 70 タバコをくわえた口 71 口をかかない 72 唇を強調 73 簡単な線で楕円, 円, 開く 74 小さ過ぎる口 75 歯を見せる 76 舌を見せる
10 顎	77 特に広い顎 (顎は下唇, 耳底から下部) 78 特に狭い顎 (横顔では突出) 79 女性像で大きい顎 80 女性像にひげをつける

11 耳	81 特に大きい
	82 耳に特殊な表現をする
	83 過少
	84 省略，位置わるい
12 音	85 長い又は細い
	86 省略又は短い
	87 肩をいからせる
31 胴	88 角ばっている
	89 丸い
	90 広い
	91 狭い
	92 細長く平行線を引いた胴
	93 胴がない
14 腕 及 び 手	94 誇張又は短い
	95 細い（簡単な線による）
	96 広く開いた腕
	97 下の方で広くなる腕
	98 胴から突出した腕
	99 長くてたくましい腕
	100 長過ぎる腕
	101 胴に密着した腕
	102 腕がない
	103 手がない
	104 左右の動きのちがった腕
	105 手指が開いている（時には影をつける）
	106 手のにぎりこぶし
	107 手の大きいもの
	108 腕が胸で交叉
	109 腕が前で交叉
	110 腕を後に廻す
	111 手を腰にあてる
	112 黒くぬられた手
	113 腕の関節部をかく
	114 ポケットに入れた手
	115 爪，関節の注意深いスケッチ
	116 鍵のような指
	117 手と関係のない指（掌のないものを含む）
	118 黒くぬられた指
	119 五本以上の指
	120 小さい手
	121 脚が長い
	122 脚がない
	123 脚の誇張

15 脚 及 び 足	124	交叉した脚
	125	長さ不同の脚
	126	一つになった脚
	127	やせた足及び透明なパンツをとおして脚をかへ
	128	大きい足
	129	小さい足
	130	足を大きくひらく
	131	足がない
	132	反対方向に向いた足
	133	足の関節をかく
	134	足指の強調
16 衣 服	135	足指をかくす, 又はばやかす (靴をはいている時は適宜に判定)
	136	ものの露出
	137	注意深くかく
	138	裸体像
	139	胸のポケット強調 (ハンカチなど入れる)
	140	ボタンの強調 (沢山つける, 一つであっても胸のあたりに特に大きいのを目立ってつける)
	141	ネクタイに特別の注意
17 出 他	142	正中線の強調
	143	衣服をつけているとも裸体とも思われない
	144	腎, 胸, 乳房など強調 (性的部分の露出をも含む)
	145	全身及びその周囲の影のようなものをつける又床や地上をかく
	146	内臓をかく
	147	解剖図
	148	手にもものをもっている
	149	からだを何かでかくした場合
	150	漫画や馬鹿げた絵 (注意を与えてもかく)
	151	絶対にかくことを拒否

実験〔二〕における人物画提示順序

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. 分裂病患者の絵 | 11. 分裂病患者の絵 |
| 2. 同 上 | 12. 普通人の絵 |
| 3. 普通人の絵 | 13. 分裂病患者の絵 |
| 4. 同 上 (但, 施設児) | 14. 同 上 |
| 5. 同 上 | 15. 同 上 |
| 6. 分裂病患者の絵 | 16. 普通人の絵 |
| 7. 同 上 | 17. 同 上 |
| 8. 同 上 | 18. 分裂病患者の絵 |
| 9. 普通人の絵 | 19. 同 上 |
| 10. 分裂病患者の絵 | 20. 同 上 |

三 結果および考察

問題指標得点をグループ(1)、およびグループ(2)について見ると、グループ(1)では、平均、12.7、S. D. 3.88、グループ(2)では平均9.80、S. D. 3.52、と検定の結果5%の水準で有意であることがわかった。

従ってグループ(1)がグループ(2)よりも多くのチェックを与えているという事実が認められるであろう。これは初心者であるために、分析規準表により忠実であろうとし、きわめてわずかな描画傾向をも欠かさず取り上げようと努めたからではないかと考えられるのである。

反面、グループ(2)では、ある程度画像全体を把握した後に分析規準を検討するという傾向にあるのではないかと考えられるのである。また、一つには判定に苦しむような場合になると、それを取らないという傾向になるのではなからうかと思われる。この点に関して実際にグループ(2)の各人について、チェックする際の心がまえをたいたところ、それに近い考え方が見いだされた。

次に、一五一個にわたる人物画分析規準項目のうちで、グループ(1)とグループ(2)の間において、チェックした数量がかなり大きくへだたっている個所が認められた。それらは第一表に示すとおりであるが、そのうち№49、すなわち悪い表情、みにくい顔、バランスのないもの、という項目において検定の結果1%水準で有意差が認められ、グループ(1)においてチェック数の多いことが明らかにしたのである。これと反対に、№44、すなわち頭髮を黒くぬる、という項目においてはグループ(2)に多くのチェックが数えられたのである。これも検定の結果5%水準で有意差が認められたのである。その他の項目については、№1、すなわち全体の塊、№10、すなわち小さい、全体の塊以下、№97、

人物画評価の客観性の検討

分析規準番号	Group (1) N=35		Group (2) N=9	
	チェック数	比率(%)	チェック数	比率(%)
1. 上 半 (全体の ½)	15	42.9	1	11.1
10. 小 さ い (½ 以下)	27	77.1	4	44.4
44. 頭髪を黒くぬる	8	22.9	6	※66.7
49. 悪い表情 (みにくい, バランスがない)	24	68.6	1	※11.1
97. 下の方で広くなる腕	2	5.7	3	33.3
137. 注意深くかく	15	42.9	1	11.1

※ P<0.05 ※※ P<0.01

すなわち下の方で広くなる腕、 λ_{137} 、すなわち注意深くかく等の項目で比較的两グループ間においてチェック数の差が多く認められるのであるがいずれも検定の結果有意とは認められなかった。一般的傾向として、グループ(1)の方がグループ(2)よりもチェック数が多くなっている。

これらの諸項目を概観するに、検定の結果有意差の認められたものは、特に49、すなわち悪い表情というチェック・ポイントであるが、これは明らかに判定者の主観的判断にもとずいてなされる可能性が大であると考えられるのである。

また、1644、すなわち頭髮を黒くぬるというチェック・ポイントにしても、チェックする人の人物画判定における経験的な要素が問題になるのではないかと考えられる。なお、注意すべきこととして、161、や1610、というような比較的主観的判断を必要としない項目においても、検定の結果有意差こそ認められないが、かなりの差があることが明らかであり、主観的因子が割合に強く作用しているのではないかと考えるのである。

次に、第二表によって各評定者の判定における一致度を検討してみたいと思うのである。

分散分析法によって

$$(S = \sum_{ij} (x_{ij} - \bar{x}_{i\cdot} + \bar{x}_{i\cdot} - \bar{x})^2 = \sum_{ij} (x_{ij} - \bar{x}_{i\cdot})^2 + \sum_{ij} (\bar{x}_{i\cdot} - \bar{x})^2 + 2 \sum_{ij} (x_{ij} - \bar{x}_{i\cdot})(\bar{x}_{i\cdot} - \bar{x}))$$

計算し、人物

第2表 各評定者の判定一覧表

評 定 者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
I	4	2	4	3	4	3	3	3	1	2	1	1	3	3	2	2	2	4	2	3
II	4	2	4	2	3	2	3	2	1	1	1	1	2	3	0	1	2	4	2	2
III	4	1	4	2	3	3	3	3	1	1	1	1	3	2	2	2	2	4	1	3
IV	4	1	4	3	3	3	3	2	1	2	1	1	3	3	2	1	2	4	1	2
V	4	1	4	2	3	2	2	3	3	1	0	1	3	2	2	1	2	3	2	3
VI	4	1	4	2	4	3	3	3	1	2	0	1	2	3	2	2	2	4	1	2
VII	4	2	4	2	4	3	3	3	1	2	0	1	3	3	1	1	2	4	1	2
VIII	4	2	4	2	4	3	2	3	1	1	1	1	3	2	2	1	1	3	1	2
IX	4	1	4	3	2	3	3	3	1	2	1	3	3	2	2	2	2	3	2	2
X	4	1	4	2	4	3	2	2	1	2	0	0	2	3	1	2	2	4	1	2
XI	4	2	4	2	4	3	3	3	1	2	1	1	3	3	2	1	2	4	1	2
XII	3	2	4	3	3	3	2	2	1	2	1	0	2	2	1	2	2	4	1	2
XIII	3	1	4	3	4	3	1	2	0	2	0	0	3	3	2	1	2	4	2	2
XIV	3	2	4	3	4	3	3	3	1	2	0	1	2	2	1	2	1	4	1	2
T	53	21	56	34	49	40	36	37	15	24	8	13	37	36	22	21	26	53	19	31
\bar{x}	3.89	1.50	4.00	2.42	3.50	2.85	2.57	2.78	1.07	1.79	0.57	0.92	2.8	2.57	1.57	1.59	1.89	3.78	1.35	2.21

画像の質と各評定者の判定によって示された評価点の両要因について検討したところ、そのいづれにおいても、かなりの逸脱のあることが確かめられたのである。

この結果から、この実験に用いた二十例の人物画像の質的要素が異なるものであるということが確認されとともに、その評定を行った各判定者によっても明らかに差異が認められ、従って評定に際して各人が主観的な要素を多分に介入させている事実を知ったのである。

しかし、先にのべた「人物画」を研究し、臨床経験の豊富である四名が、同じくこの試みに加

ったのであるがその結果四者相互の間において、差が認められるにいたらなかった。

これらの事実から、人物画を評定するに際し、評定者がもつところの経験的な要素が、結果を大きく左右するものであるということがここでも又指摘されるのである。

以上の結果に表われたグループ(1)、グループ(2)の間の差異は、この試み前にわれわれが想像した数値より小さかったことは先にのべた通りである。言いかえれば「人物画による性格分析」を現実に用いる場合、若干の個所において注意しなければならないが、その他については一般的なプロジェクト・テクニクに関する知識があれば十分用いることができるであろう。ただし、この「人物画法」そのもの妥当性ないし信頼性ないし信頼性に関しては、この研究の余地があるように考えられ、現実に修正を要するであろうと感ぜられるところも存するのである。それらについては、こんごに期さなければならないと思うのである。

四 結 論

先にのべて来た諸点から、人物画の分析には分析規準表をもつてしても、なおかつ主観的要素が入りやすいものである。この点において、現実に検査として用いる場合十分に注意することが要求されるであろう。

そして、この人物画分析には、他の諸検査においても同様であるように、臨床的経験が少なからず影響するものである。経験の續重ねにより、分析感覚を自らの中に固定化するとか、統一化することも可能であろう。これらのことが人物画分析に際して、あるいは人物画評定に際しての客観性と結びつくものであらうと考えるのである。

勿論、人物画検査法の妥当性ないし信頼性に関しては今後十分に検討されなければならないことは先に指摘した通

りである。また、この試みに用いた人物画像そのものの問題とか、研究方法に関しても十分に検討してゆきたい。

参考文献

- | | | |
|---------|--------------|---------|
| 一、大伴 茂 | 人物画による性格診断法 | 黎明書房 |
| 一、寺田 一彦 | 推測統計法 | 朝倉書店 |
| 一、内藤 勝 | 統計学 | 東大出版会 |
| 一、岩原信九郎 | 教育と心理のための推計学 | 日本文化科学社 |
| 一、岩原信九郎 | ノンパラメトリック法 | 日本文化科学社 |